

# 父島洲崎の変遷について（その1）

上 條 明 弘（父島在住）

## 要 約

洲崎は父島のほぼ中央に位置し、その地名は、1765年に幕府の名により巡見を行った嶋谷市左衛門によって付けられた。1827年、英国軍艦の艦長ビーチは本諸島の領有を宣言する銅板を洲崎の樹木に打ち付けた（その銅板は現在オーストラリアにある）。1830年、最初の定住者セーボレー達は洲崎に居を構えた。1852年、ペリー提督が父島に来航し、洲崎にあった大洞窟の記録を残している（その大洞窟は少なくとも1945年までは残っていたが、現在はなくなっている）。1861年、小笠原回収のため幕府の水野外国奉行ら一行は咸臨丸で父島に来航、当時の洲崎の様子を記録した。

## I. はじめに

父島の洲崎は、父島のほぼ中央に位置している。北側は二見湾に面し、南側も象鼻崎とその周囲の海岸で外洋に面している。西側には野羊山（やぎゆうさん）と飯盛山が半島のように伸び、東側は振分山をピークとするなだらかな斜面になっており、扇浦につながっている。現在の洲崎の平坦な部分は砂利置き場や自動車教習コースになっており、扇浦側の斜面は建設会社のプラントや残土置き場、都の農業試験所などがある。未利用の部分は移入樹木のモクマオウやギンネムなどが生い茂る疎林や草原になっている。

このように、現在は見る影もない洲崎であるが、かつては干潟が広がり、セーボレー達の最初の移住者が住み「Chief village」（最要の村落）と呼ばれる場所であった。また、水野外国奉行は洲崎を役所の候補地に挙げ、注目していた。本論文では、このような洲崎の変遷についてまとめてみたい。

## II. 父島への日本人・欧米人の来航

まずは、父島へ日本人・欧米人の来航をたどりながら、明治時代までの小笠原の歴史を概観する（この時期の歴史の詳細については、鈴木（1991）、田中（1997）、エルドリッチ（2008）を参照されたい）。

小笠原貞頼が1593年に小笠原諸島を発見したという伝説を除けば、最初に小笠原諸島を

発見したのは、寛文9（1669）年11月に遭難した紀州のミカン船であったとされている（『小笠原開拓再興一件顛末提要』（外務省編、発行年不明））。彼らは母島に漂着し、その後小船を作り、父島を経由して八丈島にたどり着いた。

幕府勘定奉行は嶋谷市左衛門に無人島巡視を命じ、延宝3（1765）年4月29日に父島に着船、父島や母島、属島を踏査した（外務省編、発行年不明）。以後、17世紀末、和船4隻が小笠原に漂着した（鈴木、1991）。

1824年、英国捕鯨船のトランジット号のコフィン船長が母島に来航し、欧米人の最初の来航者となり、以後、捕鯨船の来航が相次ぐようになる（山方、1906）。1827年、英国軍艦のプロッサム号が父島に来航、同島及び周辺諸島の測量調査を行い、艦長ビーチーは本諸島の領有を宣言する（Beechey, 1843）（このことについては後述する）。1830年6月、アメリカ人ナサニエル・セーボレー、ジェノア人マテオ・マザロ、イギリス人リチャード・ジョン・ミリンチャンプ、オーディン・チャピン（アメリカ人）、チャールス・ジョンソン（デンマーク人）の5人の白人がハワイ人を伴って父島に来航し、最初の定住者となった（Perry, 1856）。1852年、アメリカの東インド艦隊司令官ペリー提督は、琉球を経て、6月14日父島二見港にサスクエハナ号でサラトガ号を伴い入港した（Perry, 1856）。その時彼らが見た洲崎の洞窟については後述する。ペリーは6月18日二見港を出帆、一旦那覇に向かい、その後、東京湾の浦賀に向かい、幕府に開国を迫った。

文久元（1861）年12月、小笠原回収をめざした幕府外国奉行・水野筑後守忠徳、目付・服部帰一ら一行は咸臨丸で父島をめざし、19日、父島二見港に入港した（外務省編、発行年不明）。この時一行が見た洲崎の様子について後述する。水野はセーボレーらと会談し、小笠原が日本領土であることを宣言した（「定」と「小笠原島港規則」を頒告し、住民から誓書を提出させた（小花、1873-1876））。

文久2（1862）年8月、八丈島からの入植者を乗せた幕府の軍艦朝陽丸は26日、父島二見港に入港した。（外務省編、発行年不明）。これより幕府による小笠原開拓が始まり、文久3（1863）年には中浜（ジョン）万次郎による西洋式捕鯨も行われた（山方、1906）。

しかし、文久2（1862）年の生麦事件をきっかけに、幕府と英国の関係が悪化、事態は一触即発となり、幕府は小笠原から日本人全員の撤収を決めた（田中、1997）。派遣された朝陽丸は文久3（1863）年5月9日二見港に到着し、「在島の諸吏をはじめ移民一同引き上げる旨下知」され、日本人を乗せ5月13日二見港を出港した（外務省編、発行年不明）。

明治となり、明治政府は小笠原の再回収を決定し、明治8（1875）年11月24日使節団を載せた明治丸は二見港に入港し、その日の午後、欧米系住民は船上に招かれ、使節団の田辺太一は小笠原再回収を宣言し、欧米系島民は誓書にサインした（田中、1997）。明治9

(1876)年12月、内務省小笠原主張所の仮庁舎が扇浦に完成し、初代所長として小花作助(内務権少丞)が着任した(田中、1997)。そののち、日本からの移民が始まり、日本では稀な欧米系人と日本人が共存するコミュニティーが形成されることになった(なお、小花作助(作之助)については、田畑(1993)が詳しく述べている)。

### Ⅲ. 洲崎とその周辺の地名

#### 1. 洲崎

洲崎(嵩)という地名は、「古名ナリ」と、文久元年の幕府使節で外国方定役元締として同行した小花作之助(後、作助に改名)の「文久元年、小笠原島風土略記」(小花、1861)に記されている。では、文久巡検以前に「洲崎」の名はいつ名付けられたのだろうか。

『南島要録』(小花、1879)の「延宝島巡検記附図中抄」に洲崎の名が見える(『南島要録』表紙には「文久度着手の節 水野筑後守手控 南島要録 小笠原島 明治十二年十一月」とあり、次のページには小花作助が水野の記録を書き写したことが記されている)。

「一、回り十五里の島に大湊あり、西に向深さ拾二三尋なり。奥の砂白砂の場を小浦と名附。平地右の方にあり左岬迄の間は砂濱なり。この渡口は平地を大村と名付く。奥入三町なり中廣し。一丁三丁右の方まで入込を□干潟と□奥は砂にて渡口平地なり。右に入込川なり。その地を奥村と名る。夫々が岬との間に又入込川なり。鰻谷と名る。この谷の外と岬を洲崎村と名る。海岸小石にて、その上平地三町四方なり。此海岸の向西北に高き岩山なり(句読点を加え、草書により判読ができない所は「□」で表記した)」

大村から二見湾を時計回りに回り、奥村、鰻谷を扇浦(あるいは境浦?)とすると、洲崎の上の平地があり、西北の向かい側に「高き岩山」野羊山があることが一致する。また、嶋谷市左衛門が作成した地図を模写したもののコピーが小笠原村教育委員会にあり、この記述と矛盾はない。大熊(1969)は『無人島乗渡覚書』(嶋谷、発行年不明)を引用し、同様の記述をしている(ただし、「小浦」が「北浦」になっている)。

『南嶋航海日記 第四』(服部、1879)(水野達の文久巡検の記録)によると、小笠原の地名を以下のように表記している。

「小笠原嶋の内 父島 父島の内小名 洲崎村(別の箇所では「洲先」とも表記している) 扇ヶ浦 南嵩 袋澤 要越 鑄(こじり)山 仮寝山 鰻谷

奥村 二見港 境濱 巽ノ浦 初音濱 旭山 初音山  
大村 宮之濱 清瀬谷 釣浜 大根山 (兄島より以下略)

このように父島を南東から「洲崎村」「奥村」「大村」の3つに分けており、この名称は『南島要録』(小花、1879)の『延宝島巡検記附図中抄』と一致する。

また、「小笠原開拓再興一件顛末提要」(外務省編、発行年不明)には、延宝度巡視の節父島三村母島一村に分け、村名も立てられているので旧名を用い(母島については細長いので二村に分ける)、その他山川など旧名のあるものは旧名を用い、その他は新名を名付けて住民に申しわたした、とある。大熊(1969)が引用した水野筑後守・服部婦一が老中安藤対馬守に提出した報告書『小笠原島々巡見御開拓筋取調候趣申上候書付』(水野・服部、発行年不明)にも同様の記述がある(ただし、「延宝度巡視の節」の部分が「古記録中」になっている)。これらの資料から、洲崎の名は延宝3年に嶋谷市左衛門が巡検した際に名付けられたと考えられる。

また『小笠原島風土略記』(小花、1861)には、欧米人は洲崎を「チーフウイルレーヂ」(Chief village)とよび、「最要の村落」の意味である、と記されている。また、『小笠原島要録・初編』(小花、1873-1876)には「ブロッサムビーチ(花濱の義)」とも呼んだと記されている。この名称はイギリスの軍艦ブロッサム号に由来すると考えられる。

『小笠原島志』(山方、1906)には「主村(チーフビルレーヂ)といひ島民は花濱(ブロッサムビーチ)又はフラルクソン村と稱し」と記している。このように、日本人・欧米人により、洲崎にはいろいろな名を付けられていた。

『小笠原島々巡見御開拓筋取調候趣申上候書付』(水野・服部、発行年不明)には、役所や役人の住居には洲崎村が広場で地勢がよろしいので、船を遣わして木材を揃え次第ここに建てるのがよい、と記している。水野の目から見ても、洲崎は父島で最も重要な場所であった。

## 2. 野羊野と飯盛山

「野羊山」と現在の地図には表記されているが、発音は「やぎゅうさん」(野牛山)と昔の漢字の読みを現在も用いている。飛行場の工事で埋め立てられるまでは、海峡で洲崎と隔てられていたので、「野牛島」とも表記されている。「小笠原島風土略記」(小花、1861)には「野牛島 野牛多く住めり」とある。山の中に牛が住んでいるとは思えないので、欧米人が放したヤギ(山羊)の事であろう。

また『小笠原島風土略記』(小花、1861)には「一山あり形円錐形をなし四望同状にし

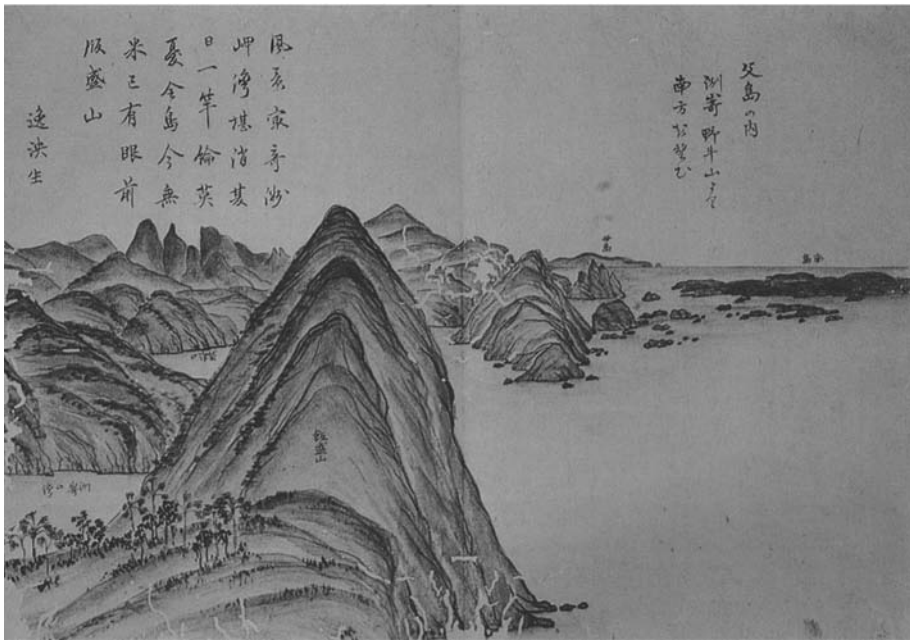


図1 洲崎野牛山より南方を望む まだ削られていない飯盛山が描かれている(小花、1862)

て入港船の目当となるによろし。今飯盛山と名付く。西人是を「シンガローフ」と呼ぶ、即ち糖餅の儀にして又其形状にとれるなるへし。（日本語はカタカナを平仮名で表記し、句読点を加えた）」とある。日本人は飯盛山、欧米人は「sugar loaf」（①棒砂糖、円錐形に固めた砂糖；昔家庭で用いた、②円錐形の帽子；すりばち山『新コンサイス英和辞典』（佐々木編、1975）より）と名付けていたのは、文化の違いを感じることができ、興味深い。なお、飯盛山は返還後、工事に使用する砂利を採取するために崩されてしまい、現在は40～50mの高さしかない。小笠原村教育委員会所蔵の「小笠原父島埋立工事平面図（縮尺壺千分之壺）」（日本海軍、発行年不明）（洲崎飛行場建設工事で用いられた図面）によると、飯盛山の標高は73.12mとなっている。『小笠原寫圖繪』（小花、1862）（咸臨丸を派遣した際、絵図方の宮本元道が描いた絵図「小笠原眞景図」を小花作助が模写したもの）には、削られる前の飯盛山が描かれている（図1）。また、小笠原がアメリカから日本に返還された直後に撮影された写真（太田健一氏所蔵）に当時の飯盛山が写っている。

### 3. 象鼻崎

洲崎南側は小さな湾のようになっているが、その南端の東から西に張り出した岩礁を象鼻崎と呼ぶ（図2）。この部分は洲崎飛行場建設で崩されたので、現在は海面よりわずかに顔を出しているに過ぎない。



図2 南袋沢境（現在の中山峠）からの風景 中央に海蝕洞のあいた象鼻崎と飯盛山が見える（小花、1862）

『小笠原島風土略記』（小花、1861）には「象鼻崎 洲崎村北袋沢海口との間にある出崎なり石門有り高さ二丈余巾一丈余もあるべし」とある。『小笠原島圖繪』（小花、1862）には中山峠付近から望んだ洲崎や野羊山が描かれており、象鼻崎の洞窟の様子が見られる（図2）。『小笠原父島埋立工事平面図（縮尺壺千分之壺）』（日本海軍、発行年不明）によると、象鼻崎（図では「象ノ鼻」となっている）の標高は55mになっている。

#### IV. 洲崎に居住した人々

最初の定住者セーボレー達は父島に到着後、洲崎に居を構えた。『小笠原開拓再興一件顛末提要』（外務省編、発行年不明）には「天保元年亜国人ナサナルセーボレ父島に渡来洲崎村にと居す」とある。『小笠原島風土略記』（小花、1861）の洲崎村の項に

「今英人のトマシアツチウ井ブ（トーマス・H・ウェブ）爰に住居す。最初外国人のこの島にこれるもの皆此村に居を在し日後、追々と各村に引分れよしと云い伝ふ。（句読点を追加）」

とある。

『小笠原島要覧』（磯村、1888）には、文久元（1861）年12月、水野忠徳が咸臨丸で小

笠原に来た時に、ナサニエル・セーボレーに島の様子を尋ねた時の答えとして、以下のよう  
に記述されている。

「其の身は今より三十二年前千八百三十年第五月布哇（ハワイ）島より転住し、同年七月父島へ到  
着洲崎村にと居。後ち奥村に転住す。然れども国命等を承て進退せしには非ず。営業上不利の事  
ありて居を北に移せし也。（句読点を追加）」

セーボレー達が居を他に移した後、イギリス人のトーマス・ウエブが洲崎に住んだ。  
『小笠原開拓再興一件顛末提要』（外務省編、発行年不明）には在留の外国人として以下の  
ように載せられている。

「父島の内洲崎村 トーマスエツチウエブ 成歳四十三 右英国ドーキン（地名）出生にて車大工  
職業の処弘化四未年重国鯨船へ乗組父島へ渡来洲崎村に居住罷在候

同人妻 アウエラインロブソン 成歳二十 右英国人ロブソン在島の節洲崎村にて出生

英国人ロブソン後家 シブル 成歳四十七

トーマスエツチウエブ妻弟 シュサンロブソン成歳六

同妹 チャルレスロブソン成歳十

同弟 ジョージロブソン成歳二

トーマスエツチウエブ方同居 トマシシメス 右英国出生にて船乗職業の処文久元酉年和蘭鯨漁  
船へ乗組渡来」（同様の記述は「小笠原島要録・初編」にもある）

咸臨丸の文久巡検の記録には、一行が洲崎のウエブを尋ねた時の様子が描かれている。  
水野に同行した八丈島出身の菊池作次郎の『小笠原島御拓開ニ付御用私用留』（菊池、  
1862）より引用する（なお、菊池作次郎については『小笠原ゆかりの人々』（田畑、1993）  
に詳しく記述されている）。

「十二月二十二日 西風、快晴、風

一、御奉行様・御目付様、諸役人方は奥村（洲崎村の誤り）へ上陸する予定で、ボートで行った  
ところ、この村は舟着場がないために、二、三町も遠廻りして、砂浜のある所を見つけて上陸し  
たが、どっちへ行っても山ばかりで、仕方なく方角を定めて山の中を高い所へ登り、また谷へ下  
り、かなり行ったところ、およそ海岸から十町も奥で鶏の鳴き声がザワザワと聞えたので、段々  
近寄って様子を見たところ、野鳥であった。いろいろ難儀して一里も行ったと思われる頃、漸

く洲崎村の家が見えてきた。

- 一、右洲崎村には建物が六棟ある。尤も家族は一軒に居る。
- 一、この村にサツマ芋・サト芋が植付けてあった。
- 一、洲崎村で当分仮役所のつもりで異人の小屋を借用なされた。」

この時、咸臨丸の一行はウエブが保管していた英国軍艦ブロッサム号艦長ピーチーが領有を宣言した銅板を見た（小花、1861）。この銅板については後述する。

『小笠原島要録 初編』（小花、1873-1876）には、水野筑後守らが父島に上陸し、奥村に住民を集めた時の名簿に以下のように記されている。

「父島洲崎村住人 英吉利国出生 トーマスエッチ、ウエブ 同人妻ヤウエラインロブリン 同人方寄留 チャルレス、ロブリン シュサン、ロブリン ショーン、ロブリン ジブル 英吉利国出生 トーマス、シメス メ七人」

『小笠原島圖繪』（小花、1879）にはウエブの居宅の様子が描かれている（図3、4）。

1869年、4月20日、ピヨネール号でアメリカ国籍のピースが来島した。ピヨネール号に乗って一年間島を離れていたウエブ一家の留守を守っていたフランス人ルイとレサンを放逐し、ピースはその家産を強奪した（小花、1873-1876）。ピースはその洲崎の土地をフランス人レゾワアーに売却した。1873年4月10日、ウエブは英国領事にピースを訴え、レゾワアーもピースの悪行（横領、恐喝、殺人未遂、殺人）をフランス領事に訴えた。1874年10月9日、ピースは何者かに殺害され、遺体は南袋沢に流れ着いた。

こうして、ウエブ達は南袋沢に移らざるを得なくなり、洲崎にはフランス人レゾワアー達が住んだ。『小笠原島要録 初編』（小花、1873-1876）の「四省官員復命書正院御伺指令共」より、明治8（1875）年小花作助らが林内務少輔に差し出した「小笠原探偵の復命書」に載せられた名簿には、以下のように記されている。

「一洲崎村 住民ブロッソンビーチと唱 サアー、レゾワアー 家主 仏国ブットン州 四十七ピジアー、レゾワアー 妻 グレガム島 三十五 アルベルト、レゾワアー 長男 父島 六フヒラック、レゾワアー 同 五 ルイズ、レゾワアー 女 同 十一 右一戸五人 内 男 三人 女 貳人

一同村 ロベルト、モリス レゾワアー属家 英領ベルムーダ 廿四、およし 同居人 神奈川県下 横浜在天沼村 十九、右一戸貳人 内男 壹人 女 壹人」（それぞれ、姓名、家族、生国、





図3 洲崎村英民ウエブ居宅野牛山の方より見る図（小花、1862）

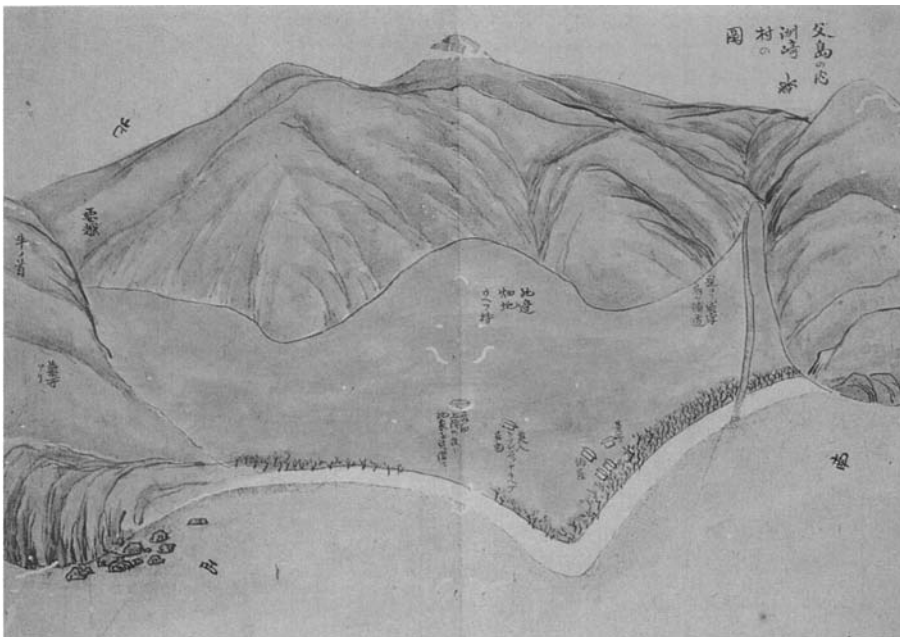


図4 洲崎のウエブの居宅と畑地を描いた図（小花、1862）

年令を示す)

同じ名簿によると、明治8年にはトーマス、エッチ、ウエブと妻（カローリン、ウエブ但ロビンソン女）とその子どもたち七人は南袋沢に住んでいる。ウエブ一家は洲崎より移住し、その後にフランス人のレゾワア一家が居住したものと思われる。また、文永元年の名簿にウエブの寄留として載せられていたチャルレス、ロブリンら四名の名前は載せられていないが、大村の住人にチャーレス、ロビンソン（父英人ロビンソン死、倅 家主、生地母島 二十一）とその妻、の名前があるので、ロブリンは正しくはロビンソンで、息子の一人が家を継いだと思われる。

『増補版寫眞帳小笠原』（倉田、1993）には、「小笠原島父島ノ内 洲崎村住民仏蘭西人サワーゼツワ居住地（整然として見事な畑は、入港する捕鯨船に野菜を売ったという当時がしのばれる。）」の写眞が載せられている。この「小笠原島父島の内洲崎村住人仏蘭西人サワーゼツワ居宅畑地」の写眞（図5）は、明治8年に小笠原回収に明治丸で訪れた外務省出仕田辺太一、内務省地理寮出仕小花作助に同行した日本人写眞師松崎晋二によって撮影されたものである（田辺、1876）。その当時の洲崎を撮影した写眞が他に2枚ある。図6では洲崎の海岸は砂浜であった様子が写されている。洲崎海峡を写した写眞（図7）では、洲崎と野羊島の間が海峡になっていて、鉄瓶岩（土瓶岩）という岩が中央に見える。



図5 洲崎村住人仏蘭西人サワーゼツワ居住畑地（1875年、外務省出仕・田辺太一に同行した写眞師松崎晋二が撮影した写眞）（田辺、1876）



図6 洲崎村海浜の景（田辺、1876）



図7 洲崎村海峡（田辺、1876）

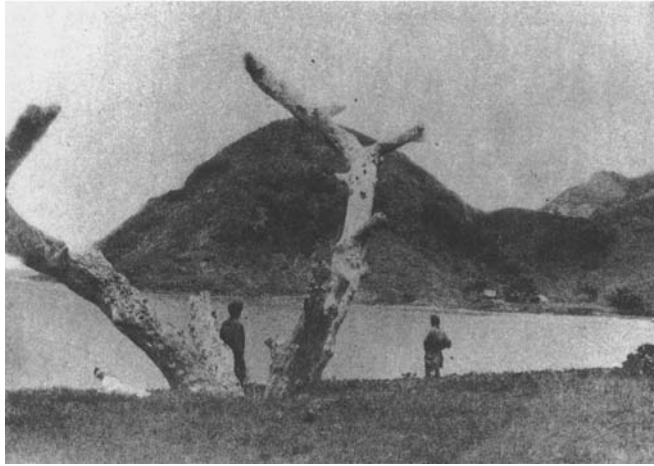


図8 飯盛山と麓の製塩所（左）（明治28年11月に北沢正誠島司が撮影した写真。）（田畑、1993）

鉄瓶岩は現在の二見湾側の海岸付近にあったが、飛行場建設の時に除かれた。

『小笠原島要覧』（磯村、1888）には洲崎に田中鶴吉が塩田を作ったとの記述がある。

「洲崎村（中略）先年田中鶴吉なるものこの地の海浜に於いて天日製塩試験場を設けしに頗る好結果を得たり依って愈大土功を起こし將に着手する処あらんとすよ餘は産業の條下に詳説すべし」

同様の記述は『小笠原島志』（山方、1906）にも見られる。

田中鶴吉については田畑（1993）が詳しく述べている。田中は1881年に小笠原に渡り飯盛山の麓で製塩を行ったが、驟雨の妨げが多く、1886年小笠原での製塩を断念した。当時の島司・北沢正誠が洲崎側から写した写真の中に製塩所の姿がわずかに残されている（図8）。

## V. ビーチーの領有宣言の銅板

ビーチーの航海記には「私はこの島を英国領と宣言するため、宣言文を刻した銅板を樹木に打ち付け、この港をポートロイドと命名し（後略）」と記述されている（Beechey, 1843）。この銅板がたどった運命について記述したい。

『小笠原島風土略記』（小花、1861）の洲崎村の項に1827年英国軍艦ブロッサム号の艦長ビーチーがこの地に来て英国領と宣言した木版に薄銅板をはってその上に彫刻した（鏤める）ものがウエブの家であり、またビーチーが作成した測量図もあったと記されている。其の銅板は横二尺五寸縦一尺三寸、木板の横の長さは三尺壺寸横は銅板と同じ長さであっ

た。此の銅板に書かれていた英文を以下のように訳している。

「貌利太尼亞（ブリタニア）王殿下の船フロソム（船名）船長エフトブリュービーチー（人名）  
千八百二十七年貌利太尼亞王殿下第四世のジョージ（人名）に代て此諸島を領せり」

明治8（1875）年11月21日、明治新政府が小笠原諸島を回収しようと派遣した明治丸が二見港に来航、あとを追って2日後にイギリスのロバートソン横浜領事を乗せた軍艦カーリューが来航した。しかしその時、既に小笠原諸島の回収作業は終了していた（田中、1997）。カーリューのエドモンド・チャーチ（Edmund Church）艦長は、1827年にビーチーがこの島の領有を宣言して、樹木に掲げた銅板をクラークスン・ヴィレッジ（洲崎）のフランス人ルサルから買い取っている。チャーチ艦長はこの銘板を島外に持ち出すという行為が、ビーチーによって英国政府が取得したであろう権益を放棄するものではない、という周到な一札を残した（田中、1997）。前掲の小花が作成した「小笠原探偵の復命書」の名簿にはルサルの名前はないので、ルサルはレゾワアーの事だと考えられる。

以上の様な経緯で、ビーチーの銅板は、イギリス人ウエブから、フランス人レゾワアー（ルサル）に渡り、チャーチ艦長へと渡った。その後、ビーチーの銅板の行方はわからなかったが、デビッド王堂博士がオーストラリア国立図書館で発見した（王堂、2005）。この銅板には次のように彫られていた。

「英国軍艦ブロッサム号、F.W.ビーチー艦長は1827年6月14日、ジョージ4世陛下の名において、彼に代わってこの諸島を占領した（前田久美子訳）。」

また、銅板を貼り付けた板には次のように彫られていた。

「銅板が取り付けられたこの板は1875年11月英国軍艦カールー号がボニン諸島に立ち寄った際、英国海軍エドモンド・J・チャーチ中佐により、ブロッサム村において発見され、司令長官A・P・ライダー英国海軍中將に提出された。以来、大英帝国は日本の利益のため、これらの島々の権利を放棄した（前田久美子訳）。」

この銅板はオーストラリア国立図書館のHPで見ることができる

(<http://nla.gov.au/nla.pic-an6411757>)。

## Ⅵ. 小笠原修斉学園（感化院）

洲崎にあった東京府立小笠原修斉学園については「西村茂次と小笠原修斉学園」（石井、1998）に詳しい。東京府立感化院修斉学園の開園式は明治44（1911）年10月12日に小笠原父島扇村字洲崎の同園講堂で挙行された（渋沢栄一伝記資料刊行会、1960）。「満8歳以上一八歳未満の不良少年を感化教養し、自治の精神を訓練して独立自営の良民に育てるため」、日課を決めて計画的組織的な教育の推進に努めた（石井、1998）。

小笠原に感化院が設置された理由は以下のような事であった。

- ①本島の地勢及び周りの風物が児童を教養するのに好適地だった。
- ②性行の改善した児童は一般民家に委託し農業を修得させられる。（各農家は「争うてその雇傭を願い出た」ほどだったという）
- ③誘惑するものがない
- ④逃走の念を断つことが出来る。

生徒数は明治44（1911）年から大正4（1915）年までで58、90、144、123、155と変わり、その内委託生も7、28、53、68、93となっている（東京府、1937）（委託生とは、技能修得と鍛錬のため農作業の従事に当たさせた生徒の事）。

感化院は大正14年に廃止されたが、森（1925）はその理由を以下のように挙げている。

- ①震災の影響により経費削減の結果
- ②島では感化不可能
- ③植民のために児童を送ったが大多数が引き返す
- ④帰りたい気持ちから民家に放火し犯罪を増やしている
- ⑤農家が特別視するので少年の将来を誤らせる

感化院の跡は現在礎石だけが東京都の洲崎農場の中に残されているという。図9の宮内省書院部所蔵の写真では、感化院の後にレゾワアーの畑地、林の後に鉄瓶岩が見える。

小笠原の感化院といえば、詩人のサトウハチロー（本名佐藤八郎）の名が出てくる。しかし、実際にはサトウハチローが感化院に入ったわけでない。ハチローが15歳の時、警察から呼び出され、彼の父（佐藤紅緑、本名洽六、新聞小説家）は彼を感化院に入れると宣言した。感化院に入れられる10日前に、父の弟子の福士幸次郎がハチローと共に小笠原で生活するというので紅緑を説得し、彼は感化院に入れられるのを免れた。1918年9月、



図9 小笠原修斉学園（感化院）（著者、発行年不明）（宮内省書陵部所蔵）

福士とハチローは父島に到着、小笠原での生活は4か月におよんだ（サトウ、1971；佐藤、2001）。小笠原での生活については彼の『随筆集落第坊主』（サトウ、1971）に載せられている。

## Ⅶ. ペリーの見た野羊山下の大洞窟

1853年6月14日、ペリー提督の艦隊のサスクエハナ号とサラトガ号は父島ロイド港に入港した。その時のペリーが見た大洞窟について以下のように記述されている（図10）。

「ロイド港内にある通称サザンヘッドに非常に珍しい自然の洞窟あるいはトンネルがあり、そこから向こう側の海岸に向かって玄武岩を貫通している。入り口の幅は約15フィート、高さ30フィートであるが、中に入るとすぐに天井は40から50フィートの高さになり、人の手で作られたような形をしていて、建築家がいうアーチ状になっており、要石（かなめいし）さえ見ることができる。水はたっぷりあってボートで端から端まで行き来することができる。ほかにも洞窟あるいはトンネルが5つ6つある。そのひとつは少なくとも50ヤード〔約45メートル〕はあり、港の境界となる岬を貫通していて、たえず住民のカヌーがそこを通っている〔明治時代に崩落した海蝕洞（日本語訳の注）。〕」（Perry, 1856）

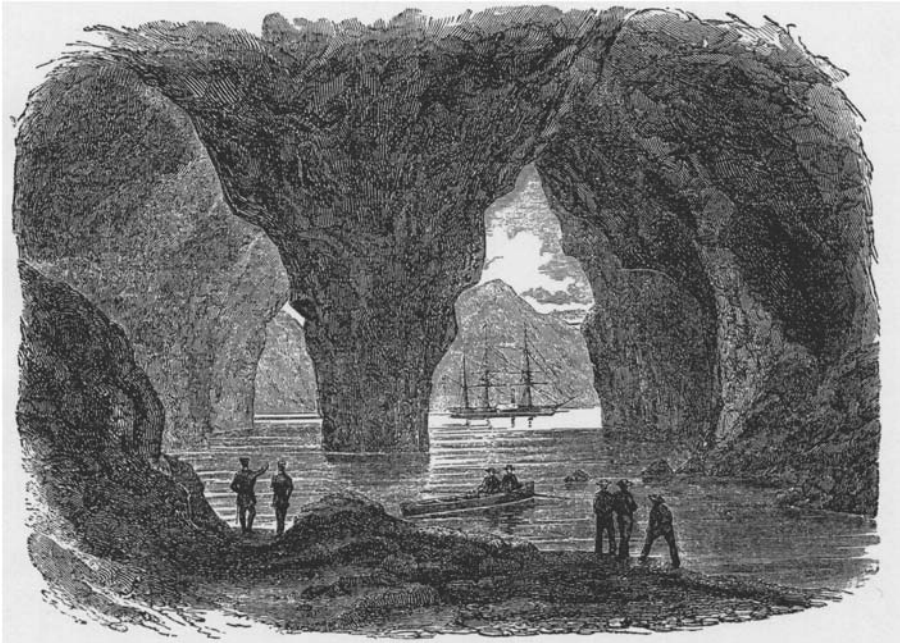


図10 ボニン諸島 ロイド港（二見湾）の自然のトンネル（Perry, 1856）

咸臨丸で来航した幕府の一行もこの洞窟を見ている。『小笠原島風土略記』（小花、1861）には

「（野牛島の）北方山下に大洞あり洞口三ヶ所にして洞中舟行自由なり高さ五六丈もあるべし。彼理紀行中絵図（図11）するもの此所なるべし。」

とある。

このサザンヘッドの洞窟は終戦まで残っていた。この洞窟を基地とした中村（1989）の証言を引用する。彼は巽湾中海岸の第五震洋特別攻撃隊（モーターボートに爆薬を搭載し、敵艦に体当たりする特別攻撃を行う部隊）本体から派遣され、野羊山に移った。

「野羊山派遣隊を拝命 硫黄島が玉砕すると、今度は父島ということであろう、直らに司令部命令で二見港防衛の派遣隊として、私達佐々木艇隊長以下搭乗員十一名、基地隊員十四名は震洋艇とともに、野羊山基地に移動することになった。

三十日夕暮本隊と分かれて、出撃の編隊訓練を兼ねながら二見湾に進駐した。野羊山は二見湾の南に突き出た岩山で、その南の入江は断崖と、白砂の多い父島では珍しく岩礁が飛び散る荒々しい海岸で、岩に打ち碎ける波は、時には高く飛沫を上げて、なかなか豪快であった。驚いたこ





図11 野牛山の洞内より北西の奥村、大村を望む図（小花、1862）

とには基地という場所は高さ十四、五米、幅十米、奥行三十米もある通り抜きの天然洞窟であった。入口からは波静かな二見港の全景が見渡せた。裏口は勾配で二人位並んで通れて少し高い位置の出口で眼下に太平洋が広がっていて、野羊山の山頂や洲崎の飛行場にも通じる陸路の玄関口でもあった。薄暗くはあったが、洞窟内に部屋もできていて震洋艇とともに居住し、空襲等に対しては全く安住の地であった。」

ペリーの見た洞窟は、飯盛山と野羊山を繋ぐ「馬の背」の北側、ちょうど崩れた跡が赤く見える部分にあったのだろうか？また、「住民がカヌーで通っている」という野羊山の北と南を貫いていた「明治時代に崩落した海蝕洞」（島の人が「ペリーホール」と呼ぶ）は、飯盛山のすぐ西側にある浜の東側に空いている洞窟（現在は土砂で埋まっている）と考えられる。しかし、いつ、この部分が崩れて洞窟がなくなったのかは定かではない。父島の要塞化と空港建設でこのあたりは民間人の立ち入りが禁止されていたから、情報が少ないのだろう。

## Ⅷ. 洲崎で撮影された幻の映画「極楽島の女王」

大正14（1925）年、洲崎で撮影された「極楽島の女王」という映画があるが、現在フィルムは見つかっていない。浅沼（1974）にこの映画の撮影の経緯が述べられているので、引用する。

「小笠原島は古くから要塞地帯、陸軍要塞司令部の許可がなければ、映画のロケーションはできな

かった。

この難関をのりこえ大正14年、父島の扇浦で敢然とロケーションを実行した人がいる。あまり知られていないので、次にこれを紹介しよう。

小笠原島で映画のロケーションをした人は、戦前戦後を通じたたった一人しかいない。小笠原プロダクションの盟主小笠原明峰先生である。明峰さんの実父は有名な海軍中将子爵小笠原長生氏。小笠原島の発見者貞頼公の末孫にあられる人である。(中略)

映画スター小笠原章二郎氏の兄にあられる。学徒時代祖先貞頼公の発見した小笠原島の第1回の旅行をされた。このとき美しい島々を見て感慨深く思われたことであろう。卒業後文化人として活躍、小笠原プロダクションを設立された。

大正14年、「極楽島の女王」という題名の映画製作のためロケーションに第二回めの来島をされた。主演は当時の人気女優高島愛子、助演は後年人生劇場を演出した有名な演出家内田吐夢氏のほか、加山雄三氏の母小桜葉子さん、潮万太郎氏、小笠原章二郎氏等で、カメラマンは当時米国籍のヘンリー・小谷氏など素晴らしい陣容であった。演出は勿論明峰先生である。場所は農村の洲崎。

私は当時おぼろげながらも、高島愛子さんの端麗姿を憶いだす。当時この映画は、日本映画界にとって技術が第一歩前進したものであるとって高く賞賛され、日本映画史に名を高める傑作であった。(後略)」

では大正14(1925)年特作映画社制作、小笠原明峰監督作品の「極楽島の女王」はどのような作品だったのだろう。『日本映画人名辞典(女優編)』(キネマ旬報社編、1995)の「高島愛子」の項より引用する。

「(高島愛子は)老人(栗原トーマス)と二人暮らしの島の娘、実は莫大な遺産の相続権を持つ行方不明の令嬢にふんして主演。財産横領を企てる悪漢(内田吐夢)を向こうにまわし、半裸になって大立ち回りを演じて冒険女優として復活。」

この映画を撮影した碧川道夫がこの映画について述べているので引用する(碧川・山口編、1987)。

「内田吐夢との出会い

大正十四年十月末、特作映画社が創立され、私は引き抜かれて、育ての松竹を去るのです。兄弟子の野村昊さんは、本当に怒りました。

「恩を忘れて、あの男は、野垂れ死にする」

その通りです。痛いことでした。

第一画作品小笠原明峰監督「極楽島の女王」は、文芸春秋にいた近藤経一氏がオーナーで、撮影所と機材を持った小笠原プロを雇い、元老のトーマス栗原さんを主役の一人にして、小笠原島でロケをしました。高島北海画伯の令嬢で、それまで日活にいた高島愛子さんをスターに仕上げるのです。このお嬢さんを誘拐するハイカラな悪役が内田吐夢で、俳優兼演出助手でした。それが、彼との出会いでした。何だか荒々しいし、メリケン臭い。だけど、どういうわけか、彼も私も気が合ったわけです。彼は、私が初めて会った異色の映画人種で、浪人風の味が漂っていました。

十二月、帝劇での試写の夜、前の年、蒲田の撮影所長になった城戸四郎さんは、大勢連れて来場されました。ただ、恥ずかしながら、一作で惨敗。

それで食うに困ってしまいました。同僚を抱えて。吐夢もその中にいました。（後略）

小笠原村教育委員会がフィルムセンターに問い合わせたところ、現在このフィルムは見つかっておらず、幻の映画である。なお、キネマ旬報（復刻版）には、この映画の広告が掲載されている（213号p22、1925；214号p22、1925；215号、p46、1926）。この映画には、ペリーが見た大洞窟も写っている可能性もある。ぜひ見てみたい。

## Ⅸ. おわりに

以上、洲崎の大正時代までの歴史について見てきた。専門外の歴史の論文を書くのは初めてなので、不手際についてはご指摘いただきたい。洲崎という狭い地域にこれだけ豊富なエピソードがあることに今さらながら驚いている。今回まとめきれなかった日本海軍による飛行場建設と第二次世界大戦における洲崎の果たした役割については、別稿で取り上げたいと考えている。

## 謝辞

この論文を執筆するにあたり、小笠原在住の皆さんはじめ、様々な方から情報をいただいた。

父島在住の延島冬生さんには、小笠原の地名や歴史、文献についての情報をいただき、相談に乗っていただいた。軍事関係の情報収集については、小笠原水産センターの太田健一さんにご協力いただいた。ペリーの見た洞窟についての情報は松原邦雄さん（フローラ）などの父島在住の方々に伺った。映画「極楽島の女王」のカメラマン碧川道夫の情報など

については父島図書室の相原美佐緒さんに提供していただいた。

小笠原村教育委員会のセーボレー孝課長・島田絹子副参事、防衛省防衛研究所、国会図書館憲政資料室、財団法人小笠原協会の佐藤義美さんには貴重な文献を閲覧させていただき、情報を提供していただいた。皆さんに感謝申し上げたい。

## 文 献

浅沼陽（1974）：小笠原父島での映画撮影の思い出、小笠原協会機関誌「小笠原」、Vol.45, pp.4.

Beechey, F.W. (1843) : Voyage of Discovery towards the North Pole, Performed in His Majesty's ships Dorothea and Trent, under the command of Captain David Buchan.

エルドリッチ, ロバート D. (2008) : 『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』南方新社.

外務省編（発行年不明）：『小笠原開拓再興一件顛末提要』外務省. (外務省外交資料館蔵)

服部帰一（1879）：『南嶋航海日記 第四』外務省. (内閣文庫所蔵)

石井良則（1998）：西村茂次と小笠原修斉学園. 小笠原研究年報、Vol.21, pp.11-24.

磯村貞吉（1888）：『小笠原島要覧』便益舎.

菊池作次郎（1862）：『小笠原島御拓開ニ付御用私用留』緑地社（田中弘之現代語訳）.

キネマ旬報社編（1995）『日本映画人名辞典（女優編）』キネマ旬報社、915p.

倉田洋二(1993):『増補版寫真帳小笠原』アボック社.

碧川道夫・山口猛 編（1987）：『カメラマンの映画史 碧川道夫の歩んだ道』社会思想社.

\*1水野筑後守・服部帰一（発行年不明）：『小笠原島々巡見御開拓筋取調候趣申上候書付』.

\*2森鏡寿（1925）：『小笠原まで. 感化教育5』.

日本海軍（発行年不明）：『小笠原父島埋立工事平面図（縮尺壱千分之壱）』日本海軍. (小笠原村教育委員会蔵)

小花作助（1861）：『小笠原島風土略記』東京府庶務課.

\*1小花作助（1862）：『小笠原寫圖繪』. (小笠原村教育委員会蔵)

\*1\*3小花作助（1873-1876）：『小笠原島要録 初編』. (小笠原村教育委員会蔵)

\*1小花作助（1879）：『南島要録』. (小笠原村教育委員会蔵)

王堂, デビット（2005）：オーストラリアに現れた銅板について. 小笠原自然文化研究所季刊誌i-Bo、Vol.14, pp.9-13.

大熊良一（1969）：『千島小笠原島史考』しなの出版.

Perry, C.M. (1856) : 『ペリー艦隊日本遠征記』アメリカ議会文書. (日本語訳版、オフィス宮崎訳、栄光教育研究所)

佐々木達編（1975）：『新コンサイス英和辞典』三省堂、1352p.

佐藤愛子（サトウハチローの異母妹）（2001）：『血脈（上）』文藝春秋.

サトウハチロー（1971）：『随筆集落第坊主』R出版.

渋沢栄一伝記資料刊行会（1960）：『渋沢栄一伝記資料第30巻』渋沢栄一伝記資料刊行会.

\*1 嶋谷市左衛門（発行年不明）：『無人島乗渡覚書』. (写本)

鈴木高弘（1991）：無人嶋・ボニン諸島・小笠原島. 東京都立小笠原高等学校研究紀要、Vol.6, pp.76-193.

田畑道夫（1993）：『小笠原ゆかりの人々』小笠原教育委員会.

田辺太一（1876）：『小笠原島写真』外務省. (国立公文書館所蔵)

田中弘之（1997）：『幕末の小笠原』中公新書.

東京府（1937）：『小笠原修斉学園に於ける児童収容累年比較』東京府.

\*1 出版元が不明。

\*2 石井（1998）より引用。

\*3 正確な発行年が不明。